

理科が危ない—明日のために—
理科を歩む—歴史に学ぶ—

江沢 洋/2001年6月

新曜社/東京都千代田区神田神保町2-10

A5判/208頁/定価1800円+税

物理学と理科教育について活発に発言し続けている江沢さんの最近10数年間の文章を集めた2冊の快著が出た。

『理科が危ない』はもちろん学習指導要領の改訂の度の理科授業時間数の削減や、「法的拘束力」という強弁で学校をしばって「人体実験」の被害を拡大しておきながら、歴史に学んで総括しようとする文部省の無責任を論じている。が、著者の目線はさらに遠くに届く。科学雑誌が次々に倒れ、図書館がただの貸本屋になり、まともな博物館がなく、さらに「ものを考えるな」と四六時中わめいているTVの存在、という現代の状況そのものの「危なさ」を「社会の学問温度が低い」という言葉で指摘するのである。

「学校は読み・書き・算の基礎を画一的に教えるところ。個性を伸ばすのは自分で、その後」に「知識がなければ思考力など発揮できない」等の記述は、「個性」や「ゆとり」の教育論への強烈な批判。「飛び級・飛び入学」に対しても鋭い。「理解が進めば進むだけ疑問も湧い



て、たくさんの宿題を背負い込む」「大学の先生に教わろうとするなど愚の骨頂である」「大学には考え抜かれた疑問をもってきて欲しい」という。「勉強するとは教わること」という近頃の風潮にピシッと釘を刺す。

もう一冊の『理科を歩む』には、夏目漱石、寺田寅彦が登場し、仁科芳雄、朝永振一郎も論じられる。「理科の周辺を歩き」「理科教育の外堀を埋める」ねらいという。

両書を読むと、江沢さんが古今東西、領域を問わないたいへんな読書家だということがよくわかる。「科学する」ことの意味をラディカルにとらえ直すのに好適な本である。(宮村博)